

B・グラント著

## 『インドネシア』

Bruce Grant, *Indonesia*, Melbourne Univ. Press, 1964, vii+190 p.

インドネシアでは混沌が組織されているという。実際今日のインドネシアを訪れる人は、おそらくそこに巨大な混沌を発見するだろう。ナショナリズムを感じる人もあれば、「革命」の証左を見る人、あるいはまた、病理現象と解する人などさまざまである。

ところで、近時この巨人はマレーシア対決やゲリラ活動、さらには国連脱退といった一連の急進的な対外姿勢により、東南アジアの一点として、その動向は広く一般の関心を喚起しているかにみえる。しかし、実際には依然として「政治的判断は数多いが、政治事実について知られていることは少ない」(p.vi) というのが実情である。

オーストラリアのジャーナリストの手になる本書は、以上のごとき情勢を背景に、最近のインドネシアの政治動向を中心として、その解釈を提示しようとする一つの試みである。同時に、それは表題の示すとおり一般向け啓蒙書の役割をも兼ねており、全体を12章に分かつ本書の構成(歴史―内政―文化―外政)がこれを示している。著者自身「学術的著述ではない」(p.vi)と断わるゆえんであろう。以下、いわゆるスカルノ体制に力点を置いて内容の紹介を行なうこととしたい。

## I

まず第1章では、マジャパヒトおよびスリヴィジャヤの両王朝に代表される栄光の植民前史から、やがて西欧列強の進出、土着勢力の屈服を経て、商業利益に専念するオランダによりトータルな植民地支配が完成する20世紀初頭までが略述される。続いて第2章の前半は、現代史の出発点である民族主義の生成・発展をたどり、日本軍政期から「革命」戦争(1945~49)期、そして独立を達成するまでの経過を述べ、ついで後半では、新生インドネシアの政治動向の推移を扱い、現状理解のための一般的な背景を与える。政党の簇生、指導者群の対立、地域利害の矛盾などがたえず政治的安定を脅かし、議会制民主主義が結局スカルノ大統領の提唱する「指導される民主主義」という形で収拾されるという、いわゆるスカルノ体制の確立過程がそれである。

この間、すでに政治諸勢力間のバランスの変化と再編

成が進行するが、著者は現体制をめぐる主要勢力を一般の見解と同様に、スカルノ大統領、共産党、軍部の三勢力と考え、続く3章をこれらの叙述にあてる。

スカルノはインドネシア最大の政治要素といわれている。第3章「この指導者」は、スカルノの大衆集会演説やその政治活動歴の中に指導者としてのかれの資質や思想傾向を探り、現体制におけるかれの位置を論じている。

著者は、まずスカルノと大衆との交流の場である大衆集会を舞台にスカルノの雄弁を描く。けだし、雄弁こそは指導者スカルノにゆるぎない大衆の支持を保証する武器だからである。会場の雰囲気、聴衆の態度や反応から演説のスタイル、リズム、声調、頻繁な繰返しとときおりまじえる外国語、さらには身振り、表情など、著者の筆、はもっぱら情緒に訴える巧妙な大衆誘導の実際を生き生きと描き出してみごとである。事実、大衆把握の観点よりするとき、スカルノ演説の意義はその催眠術的效果にあるとあってよく、この点で、スカルノが民衆に現実の困苦からの情緒的救済(カタルシス)を、そして苦難の意味づけを与えているという著者の指摘はまさしく的を射たもので鋭い。ここで Ratu adil や Mahdi といったジャワの伝統的なメシア観念を連想することは容易であろう。

スカルノの民族運動歴と政治活動を叙した部分では、1960年を境とする非同盟中立論(世界三分割)から新興勢力論(世界二分割)への比重の移動を論じた箇所(pp.45~46)が注目される。著者がスカルノを引いて新興勢力論を説明し、世界を4分の3の新興勢力と4分の1の守旧勢力に分ち、両者の不可避的対立と守旧勢力の打破を骨子とするものと述べ、その中心概念を conflict に求めているのは正しい。ただし、「いかなる国際的現実にも合致しない」という批判(p.52)はともかくとしても、「新興」ということばの意味内容、「勢力」(forces)という概念の曖昧さ、さらには、志向する体制の異なる新興諸国間の関係など、まだ不明確な点が少なくないことも事実である。

さて、一般に新生国家ほど指導者の資質のいかに問題となるが、スカルノの場合はどうであろうか。著者はスカルノに“effortless charisma”(p.47)を想定して、その指導性を(組織能力や行政能力でなく)主として啓示能力に求め、ついで、公私一体観、矛盾する思想の兼有、驚くべき体力、神秘主義的傾向、「悪名高い色好み」などを例示して、ジャワの精神風土との関連を指摘する。特に新しい見解ではなく、俳優性や誇大癖といった顕著な

傾向を考えれば、劇化的性格一扇動家的タイプのジャワ変型ともいえよう。また、著者は対比的に近代主義の雄、S・シャフリルと経済関心の強いM・ハッタをあげているが、指導者資質の差異が新生インドネシアの軌跡に対してもつ意味は、今後とも具体的に究められるべき問題であると思われる。たとえば、スカルノの功績を政教の分離、国民的統合の推進、民族矜持の高揚とするのは定説となっているが、それらが非民主的な権力集中や民族エゴの肥大を伴うスカルノ流の達成であることはもっと問題とされてよいであろう。

ところで、近來ますます熾烈なスカルノの急進的姿勢（言辞）について著者は二つの解釈を与える。一つは軍部と共産党勢力との反目という状況における「練達な政略家のカムフラージュ」（p. 52）、すなわち、共産党勢力の支持をえて唯一の脅威たる軍部を押え、自己の主導権を確保するための政策とするものである。もう一つは「革命」にもかかわらず社会的・経済的福祉の向上がみられない現実に対する補償——そこから「革命」の未完成が導きだされ、民衆の現実の困苦が（また同時に指導者も！）正当化されるという逆転を生む——とする解釈である。それぞれ、スカルノが大衆の信奉を基盤に諸勢力の均衡の上に立っているのだとする大方の見解に則したものと見えよう。したがって、著者は、スカルノがかれを取り囲む（権力）状況に拘束されている点にかなりのウエイトをおく一方で、スカルノ個人の政治力が状況からの大幅な独立を可能にしている面も軽視しえない、と主張する。あえて単純化を行なえば、この状況拘束力は内政面で強く、外政面ではほとんど作用していないように思われる。このことは、外に対して急進、内に向かっては保守というスカルノ体制の際立った姿勢の要因を説明するものであろう。

この点で、しばしば unpredictable と評され、また不決断の独裁者といわれるのも、スカルノの個人的資質と現下の権力状況の圧縮的表現といえよう。

## II

一般に、共産党（PKI）と軍部は現体制をめぐる同床異夢の二大勢力と評される。著者は、スカルノについてこれら二者をとりあげる。

PKIを対象とする第4章は、アジアで最も古い共産党の曲折を、すなわち1920年の創立から、最大の組織政党として黨員数250万を誇るにいたる1963年までを要約して、現状の考察に向かう。現状に関する著者の言及は、

共産党指導者の入閣、軍部との確執、慎重な回教対策、勢力域、中ソ論争の波及など多岐にわたり、総じて、PKIがスカルノに密着しつつ、エリートと大衆の間隙を突いて、着実にその勢力を伸ばしている状況を描いている。しかし、他方で軍部や回教篤信者等の根強い反（非）共勢力ないし反共感情の存在を指摘しており、たとえばPKIの政権獲得については、現在そのような事態が生じた場合、内戦と外領諸島の離反が予想されるとして、PKIはむしろ Post-Sukarno Period における軍部との対決に備えて地道な勢力拡充をはかるのを得策と考えている、と述べている。このような著者の PKI 観はほとんどすべて一般の見解と一致するのであるが、共産党勢力の急速な拡大という叙述内容にもかかわらず、なぜか切迫した感じを与えない。その理由は主として軍部に関する著者の判断に関連しているようである。

軍部を扱う第5章は国軍の歴史と動向を跡づけ、また中心人物ナスチオン將軍をめぐる考察が含まれている。軍部が政局の動向に「決定的な役割」を担っているとする見方には、およそ異論がないであろう。ここでは軍部とスカルノの関係および軍部とPKIの関係の2点から著者の考えを紹介しよう。第1点に関する著者の見解は、スカルノの優位のもとでの両者の共棲関係におちつく。周知のとおり、歴史的にも軍部の政治介入は常にあったし、時にはスカルノの地位を脅かしたこともある。しかし、スカルノに対する圧倒的な大衆の支持やかれを信奉する軍幹部（特にジャワ出身の士官）の存在、などに加えて、スカルノの巧妙な人間操作は、かれの優位を保証してきたのである。他方で、軍部の政治家にいく不信任感がスカルノの「指導される民主主義」に吸収されていらい、両者の共棲関係が生じ、軍部エリートが政治エリートに組み込まれた結果、軍部本来の（政治）改革意欲はむしろ鈍化しており、したがって、現段階においては軍部とスカルノの間に緊張関係はないと著者は判断する。つぎに、軍部、とくに陸軍とPKIとの対立・反目関係はすでに（むしろあまりにも）常識となった観があり著者自身もPKIの軍部への浸透にふれてはいるが、基本的にはこの常識に立っている。すなわち、PKIが Post-Sukarno 期に備えていると同様に、軍部もまた現政権中枢に PKI 勢力が及ばぬよう監視するとともに、きたるべき PKI との権力闘争に備えて勢力の保存・扶植を計っていると観測するのである。著者の見解は常識的というかぎりでは異論の余地はない。ただ、著者の判断が、もっぱらナスチオン統率下の陸軍を主眼にしている

ので、さらに軍部を陸海空と分けて、それぞれを反共、中立、容共とする推測や、陸軍についてもナスチオン（国防関係統合相）よりもA・ヤニ（陸相）を重視する見方のあることを付け加える必要があろう。

ところで、軍部の意義は反共勢力というに尽きるものではなく、著者も反共即親西欧ではないと警告する。ソ連からの武器購入を、またマレーシア紛争における軍首脳積極的な態度をどう解釈すべきか。ナスチオンも「東南アジアに英米の軍事基地のあるかぎり、わが国の安全は保証されえない」と語っている。とすれば、いったい、政治勢力としての軍部のポジティブな姿勢は何であろうか。これに対する著者のはっきりした回答はない。しかし、ナスチオンに関して言及した箇所より察するならば、それは、インドネシア国家の名誉と尊厳の真の守護者として、軍事力による対決をも辞さぬほど強烈なナショナリズム——ほとんど国権主義？——の担い手というイメージではなからうか。ここで改めて、軍部がスカルノの対外姿勢を裏面で支えるという共棲関係の積極的な側面が注目されよう。実をいえば、ここではまだおぼろげなこの「ナショナリズム」こそ、本書後半のライトモチーフとなるもので著者が共産化の脅威にもまして差し迫った関心を寄せるものなのである。

### III

第6章「経済」は文字どおり、長期的停滞に悩むインドネシア経済の現況を素描する。もとより、経済分析といったものではなく、むしろ著者の面目は改革努力（不在）を論じた箇所にある。

すでに第3章で著者はスカルノの経済観にふれ、「砂漠の民が経済問題を解決しているとき、（自然の恩恵に浴する）わが国でそれを解決しえぬ理由があろうか」（p. 39）とスカルノ自身をして語らしめている。この単純な信念——それはスカルノだけのものではない——が経済問題の軽視をみちびき、極端な政治優先を許した一因となったことは見易い道理である。そして今日、自然の恩恵も限度に達するかにみえ、経済的困難は深刻の度を加えつつある。したがって、真剣な改革努力の必要は明白なのだが、この点で著者の見解はまったく悲観的である。

たとえば、著者は「マレーシア対決」について、それを「対外的冒険によって国内の（経済的）困難から人心をそらす」政策とする一般の解釈からさらに進んで、このようなスカルノの「常套手段」を単純にスカルノ個人

のマキャヴェリズムとは考えず、むしろ、それがスカルノ・レジームに根ざすものと考えている。すなわち、現体制はそれを支える諸勢力相互間の力関係を現在のままに保つことを必要としているために、この均衡を乱す政策、したがってほとんどいかなる経済改革も、遂行しえないというのである。官僚も民族資本家・地主も、また労働者・農民も、それぞれが自己に不利の生じないように監視しているとき、八方美人の現体制には意味のある改革努力は期待できないと著者は断ずるのである。はたしてこのように断定してよいものか多少の疑念は残るにしても、著者の見解が現体制の側面をかなり適確に指摘していることはまちがいない。「インドネシア型社会主義」の曖昧さ、私企業に対する態度の不明確、農地改革の渋滞など多くの事象は著者の見解を支持していると考えられるし、また、つぎつぎに打ちだされたもろもろの改革政策の挫折も一部その証左となろう。「それが軍隊の規律を破壊するという理由から戦争を好まなかった将軍」は、そのまま経済改革に対する現指導者の態度にも通ずるようである。

第7、第8章（文化的多様性の記述）は、省略する。

第9章「国民」はさまざまな社会的地位をもつひとびとと著者との対話をつらねて、いわば世論調査の体をしている。なかでは、スカルノを信奉し、National Identityを熱っぽく語る外務省の一官吏と、現体制のもとでインドネシアが経済的にも道徳的にも破局を迎えるものと考え、指導層に露骨な敵意と痛烈な批判を浴びせる銀行書記の二者が、際立った対照を示して興味ぶかい。このほか、旧社会党員とおぼしきインテリや享乐的なブルジョア娘などが登場するが、いずれにもインフォーマルな意見がうかがえておもしろく、反面、著者の現地経験の豊かさを看取することができる。

### IV

第10章および第11章において、著者はインドネシア政治の最もはなばなしい側面＝対外政策を吟味する。そのさい、当然とはいえ、論述はマレーシア問題をめぐって行なわれる。

はじめに、著者はこの国の対外政策を規定してきた二つの「考慮」、非同盟中立と領土保全を指摘する（ことさらに領土保全が強調されるのは、この国の地理的条件、外領の遠心的傾向によって理解されよう）。しかしながら、ただちに「第3の要素」が加えられる。それは近來

著しく認められる傾向で、著者は、これを「東南アジアにおける第1の勢力」として、また「新興勢力の旗手」として、国際的認知を迫る努力と説明している。マレーシア紛争および CONEFO（新興諸国会議）構想との関連は明白であろう。

ところで、当面の「マレーシア対決」については、その意図が奈辺に存するのかこれまでも幾多の推測がなされてきた。著者もまた経済困難その他内政面の思惑を否定しない。しかし、ここでの著者の力点は、インドネシアの表明する態度を額面どおりに、そのまま対外姿勢の基調とみることにおかれている。著者はこの紛争の経緯を検討して、「マフィリンド」構想やボルネオ諸領の民意調査は、インドネシアの要求——被包囲感の解消と当該地域民衆の意向の尊重——を満足させたはずだと考える。少なくとも通常的外交観念よりすればそのはずであった。それにもかかわらず、マレーシアを受けいれずに「対決」をえらんだのはなぜか。著者はその基本的理由を上「第3の要素」と「革命的」外交論（スバンドリオ外相）に求める。

すでに pp. 25～26 で「大インドネシア」理念の底流を示唆した著者は、ここでさらに、R・アブドルガニ情報相やナスチオン国防相のことばを引いて、インドネシアの指導国意識を指摘する。事実、くり返し表明される領土的野心の不在も、周辺地域にインドネシア式の「正義」を施す「権利」の放棄を意味しないのである。また「在来的」外交（Conventional “quid pro quo” 外交）によっては「国際的不正義」（植民地支配や外資による搾取など）を除くことが不可能な現状にあっては、国内におけると同様に対外政策面においても「革命法則」に立脚せねばならないという。この「革命的」外交の手段が「対決」（Kon-frontasi）なのである。

したがって、マレーシア問題を上記に従って解釈すれば、インドネシアはマレーシアのもたらした被包囲感の解消を、また反西歐的傾向の強い中立国としての行動の自由を、関係諸国との協議（相互保証）に求めず、「対決」による「包囲」の突破（同時に域内主導権の追求）に求める決意をしたものと判断される。もちろん、オーストラリアを含めた隣接諸国の側で、インドネシアが域内支配の「野望」をもつとの疑いがいだかれている以上このような「野望」の達成を容易にする妥協、究極的には英（米）軍事基地撤去の要求を受け入れることはできないから、そこに生ずるものは域内勢力均衡の問題となる。こうして、インドネシアが長期的に域内ヘゲモニー

の達成を確信しているとすれば、これまた長期かつ高価な犠牲によってしかその「誤り」を正すことはできないであろうと著者は結論する。

以上、著者の見解はインドネシアの被包囲感——1958年反乱に際する外国干渉の記憶はまだ新しい——を正当に認めたいうえで、なおあくまでも“quid pro quo”原則の立場からインドネシアを批判したものと見てよいであろう。また、そのかぎりでは一つの見識といえる。ただ“quid pro quo”原則の評価いかんで異論が出てくるのは別として——その場合は東南アジアにおける英（米）軍事基地の存在が問題の核心となろう——、マレーシア結成の意図ならびにその現実的意味についてなんらの検討を行っていないのは片手落ちの感を免がれえない。オーストラリア的偏向というべきで、SEATO, ANZUSを常識と考え、マレーシア成立を歓迎するオーストラリアの立場の反映を著者にみることはむずかしくない。もっとも、著者の警告は共産勢力（PKI）に対してよりも、むしろ極端なナショナリズムに対して発せられているのではあるが。

ほとんど国権主義と判断されたインドネシア・ナショナリズムに対する危惧は、最終章「将来」にいたっていよいよ強くなり、すべてにわたって悲観的な見通しが多少とも悲壮な調子をもって述べられる。

そこでは、栄光あるインドネシアの権化スカルノのもとに推進されてきた国家意識の異常な肥大を背景としてスカルノ「専制」と「指導される民主主義」が、排外姿勢と対外的冒険が、後継者問題がそしてますます高まる期待と現実の成果とのギャップが、語られる。描かれるインドネシアは、低開発国の問題——経済発展と新生国の問題——国民的統合との二者を結合することなく、両者の徹底的な不均衡に悩む姿といえようか。章末、著者が「今やこの国のナショナリズムも隣接国との抗争をひき起こすまでに肥大した」と結ぶとき、かつては植民地支配から脱却する原理としてのナショナリズムに「理想主義の一形態」、「再生の理念」（p. v）を見いだして熱中した著者の嘆きと感ずる人もあろうか。

以上、多少のコメントを付しつつ本書の内容紹介を行なった。内容が紹介者の関心をいさぐ問題に偏したきらいがあるが、最後に一言すれば、本書は「概説書」としても量的に手頃で、巧みな叙述はよくインドネシアの近況を伝えており好著と言うことができよう。

（調査研究部東南アジア第1調査室 安中章夫）